

マーガレット・ドラブルの小説  
風俗小説の復活

依岡道子

Margaret Drabble's Novels  
A Renewal of "Novel of Manners"

Michiko YORIOKA

I

American readers might well ask, who is Margaret Drabble? This is a question that, I believe, will not be posed much longer, for Margaret Drabble is a striking interesting and productive young British novelist.<sup>1</sup>

これは雑誌 *Contemporary Literature* (1973年度) に掲載されているマーガレット・ドラブルを紹介する記事の一部分である。ドラブルは処女作 *A Summer Bird-Cage* (1963) から最新作 *The Ice Age* (1977) に至るまで八篇の長編小説を書き、新人賞の「ジェイムズ・テイト・ブラック記念賞」等を受賞する英国では有望な小説家であると言われていた。しかし作品に対する評価はさまざまであり、不確定である。

B. Bergonzi は初期の作品(第1, 2, 3作)に対しては、賞讃しているが、それ以後の作品に関しては、次のように述べている。

In successors, *Jerusalem the Golden* and *The Waterfall* are disappointing. As attempts at revealing the consciousness of intelligent young women in love with more or less unsuitable men they have moments of psychological insight, but they tend also to be embarrassing and unconvincing over long stretches. They represent that aspect of Margaret Drabble's art which is closer to women's magazine fiction than to George Eliot or Henry James.<sup>2</sup>

これらの作品の場合は、若い女性たちの不毛の愛の世界がテーマであり、ヒロインの不安で希望のない将来という点で、倫理性からの批難を受けることもあろう。しかし "Drabble's novels are studies of human nature with the emphasis on feminine nature." という批評の示す如く、人間性の追求という点に於て、更に「能力」(competence) と「独立」(independence) を強調しているという点に於て、読者に訴えるものがある。

彼女の小説は、奇抜なストーリーや異常な人物の登場するマードックの世界とは異なり、英国の中産階級に於ける日常の人間関係を描いているという点で、目新しさによって読者を引きつけるという作品ではない。

かってドラブルは、インタビューで、自分の小説について

I don't want to write an experimental novel to be read by people in fifty years, who will say, ah, well, yes, she foresaw what was coming. I'm just not

interested. I'd rather be at the end of a dying tradition, which I admire, than at the beginning of a tradition which I deplore. (BBC recording 1967: "Novelists of the Sixties")<sup>4</sup>

と語っている。そのことばの通り、彼女の小説技法は、いわゆる心理的リアリズムの方法であり、描かれる世界は、恋愛・結婚・性を中心として展開される人間関係の諸相である。常に屈折した内部意識を持つヒロインの意識の襞、微妙な心の動きが、細部にわたって描写されている。

## II

ドラブルのヒロインの殆んどが、未婚・既婚を問わず若い女性である。彼女達は、中産階級的な家庭あるいは、因襲的な社会に反撥し、そこから脱出したいと願い、新しい生活を求めて苦闘する。しかし彼女達の自意識の中での家庭や社会への批判は、無意味であったこと、自分が批判している既成社会と直接に自らかかわりあいを持っていることへの認識の過程が、抽象的概念としてではなく、日々の些事や人間関係を通して、ヒロインの感情・心理・意識の中で、自然に巧みに語られている。彼女達に共通にみられる青春時代特有の前時代への反撥から始まり、素朴な彼女達独自の体験を通じて、自己分裂を起すことなく、現実の手応えを痛切に感じ、社会との連帯感を見出すというのが、共通したテーマと言える。

特に、ドラブルの初期の小説に登場する未婚の女性達は、共通して知性に溢れ、感性が豊かであり、それぞれ大きな希望と情熱を抱き、あるいはふとした偶然から重大な問題を抱え、自らの歩むべき道の模索が始まる。ヒロイン達の自我意識からの開放と自己形成、人間としての精神的成長の過程という観点からドラブルの小説を捉えてみると、書評などにみられるように、ドラブルの小説を一種の「教養小説」(bildungs roman) と言うことも可能である。

しかしヒロインの自己形成自体が小説の主体というわけではなく、苦闘の結果現実を知り、結果的に成長を為しえたということであろう。ドラブルの小説のおもしろさは、彼女達が苦闘を重ねる社会の中で彼女達が示す自己矛盾、自己欺瞞、俗物根性等々であり、その背景をなす英国社会(地方・都会)の風俗、殊に中産階級の風俗であり、そこから現実とは何かの疑問が投げかけられている。

英国の伝統的小説というのは、L. Trilling の指摘する如く、現実を追究することであるが、

The novel, then, is a perpetual quest for reality, the field of its research being always the social world, the material of its analysis being always manners as the indication of the direction of man's soul.<sup>5</sup>

ドラブルの小説も又、社会が探究の場である。英国の社会に於ては、かつての階級意識は薄れ、無階級化—文化的に無階級—の傾向にあると言われる。しかし「心的態度は我々がふつう思うよりは、ずっとゆっくり動いている」<sup>6</sup>らしいから、人間の意識と行動とに矛盾が生じるのである。

ドラブルのヒロイン達は、概ね中産階級の家庭の娘たちである。彼女達の既成社会に対する反撥は、そのような階級のもつ倫理観、価値観への反撥から来ているが、それは彼女達自らの中に深く根ざしているゆえに抜き難く、時として自己矛盾を暴露することになる。ドラブルは中産階級(上層・中層)の家庭の影響の抜け難いヒロインを社会に送り込み、その反応や人間関係の妙味を客観的に描写することにより、現代の風俗の多様性を描写していると思われる。

ドラブルの小説を「風俗小説」の復活として捉えてみたいが、抑々「風俗」とは何であろうか。L. Trillingによれば、

What I understand by manners, then, is a culture's hum and buzz of implication. I mean the whole evanescent context in which its explicit statements are made. It is that part of a culture which is made up of half-uttered or unuttered or unutterable expressions of value. They are hinted at by small actions, sometimes by the arts of dress or decoration, sometimes by tone, gesture, emphasis, or rhythm, sometimes by the words that are used with a special frequency or a special meaning.<sup>7</sup>

ということであり、「小説では風俗が人をつくるというのが不可避的な真理である」(“...in the novels manners make men.”)<sup>8</sup> という事が英国伝統小説に於て言われる。アメリカ人が風俗を丹念に調べることは詰らないことであると考えるのは趣を異にし、伝統的小説の概念からすれば、英国社会は従来風俗を表現するに足る外観の複雑さを持っていたと言える。しかし多様性を誇る現代社会に於ては、風俗をどのように捉えるかは難しい問題だが、ドラブルはヒロインの言動を丹念に掬い上げ、「隠れた意味のざわめき」(a culture's hum and buzz of implication)を描写している。次に、未婚の女性がヒロインである初期の作品を中心に、風俗をいかに捉えているかを見てみたい。

*A Summer Bird-Cage* (1963) のヒロイン、サラはオックスフォードを優秀な成績で卒業したばかりの美人だが、自分より一層美貌を誇る姉ルイズに子供の頃から無視され、劣等感を抱き続けて来た。その姉の婚約から結婚の様を観察し、行末に何か不吉なものを予感しているが、その一方、サラ自身姉の結婚を機会に自らの身の処し方の決断に迫られている。彼女は自分の前にある因襲的人生に埋もれたくはなかった。彼女の反撥する因襲的なものとは、地方の既成社会の価値観、倫理観であり、これはその他の作品のヒロインと同じであるが、具体的に言えば、何かと口煩い中産階級的な家庭、家人の使用人に対する態度、社会に於ける女性のあり方に関する女性自身の意識、そして結婚等々である。反撥と将来に対する焦燥感、更に姉に対する無意識の挑戦と重なり、彼女はロンドンに出て来て働き始める。ヒロインは因襲的なものに反撥しているものの、自らの中に潜む同質のもの存在に気付かないわけではなく、従って他者否定は自己否定と結び付く。ロンドンでの生活の淋しさ侘しさ、他者との連帯感のなさ、疎外感が、アメリカに留学中の恋人を思い出させ、結婚へのノスタルジアを抱かせる。この小説のおもしろさは、オースティンの小説の主たるテーマである「結婚」を鏡にし、そこに写し出されるサラの複雑微妙な女性心理であり、彼女の俗物根性振りにある。

「結婚が女性を正当化する時代が過ぎ去った」(“The days are over, thank God, when a woman justifies her existence by marrying.”)<sup>9</sup> と言っても、未だ結婚を象徴する「鳥かご」(bird-cage)に入りたいと願う女性が多く、中流・上流社会の女性について、「強力で美しい女性が、人生と自らを軽蔑し、死物狂いになって幸福を追いかける」(“...at Cambridge there was a succession of them, high-powered, pretty girls, the daughters of earls and artists, all despising life and themselves and fanatically in pursuit of happiness....”)<sup>10</sup>とドラブルは登場人物に語らせているし、サラの姉のように金持の男性を見つけ、人生に妥協して結婚するのが、現代の中産階級の若い女性達の夢であることをはっきり示している。結婚に於ける風俗から見て、オースティンの小説のヒロイン達とどれ程の差違があるだろうか。ヒロインのサラは、そういう結婚に反撥するのであるが、その反面 “I

thought about jobs, and seriousness, and about what a girl can do with herself if over-educated and lacking a sense of vocation.”<sup>11</sup> と職業意識の欠如を告白している。そしてロンドンに来て仕事についたが、“In the end I got a job with the BBC. It seemed better nothing, and it was work, with all the added charms of coffee-breaks, desks, lifts and catching the Tube home.”<sup>12</sup> と述べ、この半ば自嘲的なことばは、前の引用とあわせて、中産階級の女性の職業意識の程度を、ヒロインのことばによるものだが、かなり客観的に物語っていると思う。

一方ヒロインの自己矛盾は、その俗物根性の中に見出される。例えば、職業意識を持ち、教師をしているいとこのダフニーに対しては、彼女が独身で醜いということで、いつも悪意に満ちた軽蔑のことばで徹底的に批難している。

「俗物根性というのは、階級的自負とは別物である……俗物根性の方は、職能に対する誇りを件わずにただ身分だけに対して抱くところの自負である。」(“Snobbery is not the same thing as pride of class.... Snobbery is pride in status without pride in function. And it is an uneasy pride of status.”)<sup>13</sup> と L. Trilling は述べている。

従って、俗物根性は不安や自意識や自己防衛といった感情にとりつかれた人間、言い換えれば、自分は本当はリアルでないけれど、何とかして現実性を獲得したいと願う人間に見られるものであろう。

「結婚」に関してオースティンの小説以来、愛情のない金銭の為の結婚は倫理的に否定されているが、サラの姉のように知性に溢れる女性が、金銭と名誉の為に結婚するのは、自分のリアリティを証明したいと願う若い娘達のやはり一種の俗物根性であろう。姉の結婚が金銭の為であることがサラにもわかったが、小説の最後の場面で、姉自身の不義によって結婚生活の決定的破局が訪れた時、

The oddest thing of all is that she seems to have forgiven me for existing. She's so nice to me now, so genuinely nice : she tells me all sorts of things. She even said once that in marrying Stephen she was trying to stop me over-taking her.

She also said that when Stephen went and caught them together in the bath, what upset her most was that she was wearing her bath-cap. To keep her hair dry. She said she would have started a scene if she had had her hair loose, but with a plastic hat on like that she felt so ridiculous that she couldn't.

She must at heart be quite fond of both John and me : of John, to have worn it, and of me, to have told it.<sup>14</sup>

と言う姉の告白は、現代の若い女性の気質と結婚に関する意識を物語っており、結婚の動機がいかにか他愛ないものかという事と、中産階級の娘達の自意識の強さと俗物根性振りを示している。それでいて社会から離れることなく強い意志を持ち力強く生きる姿が描かれている。この小説は現代社会での、結婚の風俗をドラマ化していると言えよう。

*The Millstone* (1965) のヒロイン、ロザマンドも、父親が大学教授であるということで、やはり中産階級に属しているのだが、父親がアフリカの大学で教えている間、ロンドンにある父親のフラットに住み、大英博物館の図書室で資料の研究をし、一人の生活を楽しんでいる。彼女の両親は社会主義的な原則と中産階級的な良心が奇妙な結合をなす、一見進歩であると見

える人々であるが、回教徒的伝統の持つ耐え難い性格を政治観・倫理観に持ち込み、ロザマンドは両親に対して何となく偽善者めいたものを感じ、両親を次のように批判している。

“They have to punish themselves, you see,” I said. “They can’t just let things get comfortable. All this going to Africa and so on, other people don’t do it, other people just say they ought to do it, but my parents, they really go. It was the same with the way they stuck to their principles, never asking us where we’d been when we got back at three in the morning, sending us to state schools, having everything done on the National Health, letting us pick up horrible cockney accents, making the charlady sit down and dine with us, introducing her to visitors, all that kind of nonsense.”<sup>15</sup>

そのような両親の奇妙な自己犠牲的性格と同質のものを、ロザマンドも受け継いでいるのであり、家庭教師の仕事を引き受けるに当り、

I suppose I taught because of my social conscience. I was continually aware that my life was too pleasant by half, spent as it was in the gratification of my own curiosity and of my peculiar aesthetic appetite. I have nothing against original research into minor authors, but I am my parents’ daughter, struggle against it though I may, and I was born with the notion that one ought to do something, preferably something unpleasant, for others. So I taught.<sup>16</sup>

と洩らす。更に彼女自身も中産階級である両親の影響を受け、億病で上品で品行方正であり乍ら、他方ではその正反対と受けとられるような軽卒な行動をとり、“I enjoyed the image of my own imaginary wickedness...”<sup>17</sup> と言う。

自らの倫理観を問われるような、ボーイフレンドとの付き合いを愉しむのは、自分の中に既成社会の倫理観の存在を認めるが故の行為であり、自らそれを否定せざるをえないからである。一方、頑に自らは純潔を守り、罪の意識はヴィクトリア朝のものである。そして皮肉にも唯一回の偶然の、しかも初めての肉体関係によって妊娠し、苦闘が始まる。最早かつての悪女振りを愉しむという一種の反抗のイメージを弄ぶ余裕などはなくなり、忽ち子供を産むか否かの決断に迫られる。初めて訪れた産科医の待合室での経験は、彼女にとって現実認識の第一歩となっている。ロザマンドは、自分の学問の世界、自分の近隣の上流階級の人々とは異なる人々の存在に気付くが、彼女のことばの中に、潜在的階級意識があらわれている。

It seemed a shame. And there we all were, and it struck me that I felt nothing in common with any of these people, that I disliked the look of them, that I felt a stranger and a foreigner there, and yet I was one of them, I was like that too, I was trapped in a human limit for the first time in my life, and I was going to have to learn how to live insideit.<sup>18</sup>

この不遜とも聞えることばは、現実の厳しさと恐ろしさを知らない若い女性の実感であろう。相手の男性が真近に居ながら、向うが逢いに来ないのなら自分も逢いたくないという自意識の強さ、そしてその自意識の強さの故に、相手の男性に打ち明けることもなく私生児を産むという決意は、軽卒そのものであっても、現代の若い知性豊かな女性の意地をみせるものであり、これも現代の中産階級の女性の一つの風俗を示すものではないだろうか。

私生児の出産という偶然の出来事は、大きな現実の存在を示すものだが、反面ヒロインの反撥する既成社会には、彼女のモラルに反する行為を黙認し、可能にさせている諸々の要素があ

り、ヒロインはそれを認めざるをえない。例えば、彼女の社会的地位（彼女は近く大学の教官になる）、中産階級の両親のフラットを利用できる幸運、環境による恩恵。それらについてロザマンドは、社会構造を超越したようなことを言い乍ら、自らそれを利用して来たことを認め、*“So, in a way, I was cashing in on the foibles of a society which I have always distrusted; by pretending to be above its strictures, I was merely turning its anomalies to my own use.”*<sup>19</sup>と云う。

ドラブルはインタビューアーの質問 *“A significant characteristic of the young women in your novels is their inability to accept the values of their parents.”*<sup>20</sup> に対して、同意している。

ロザマンドの両親が彼女の状況を他者から聞き、彼女の気持を察して「インドにあと一年滞在することになった」という便りがとどいたが、以下がその時の彼女の反応である。

As a child, I used to endure any discomfort rather than cause offence. I would eat thing I loathed, freeze to death in underheated sitting-rooms, roast under hair-dryers, drink in cafés from chipped and filthy cups, rather than offend hosts, waitresses, hairdressers. To me the pain of causing trouble was greater than anything that I myself within myself could endure. But as I grow older, I find myself changing a little. Partly it is because, with Octavia, I cannot inflict all hardship on myself alone: what I take for myself, she gets too. And I was glad that my parents went to India; the physical comfort of their absence was greater to me than the mental disquiet of considering that they had taken so large a decision on my account. There was a time when this would not have been so; I sat at the kitchen table with the letter still open in front of me, and contemplated my growing selfishness, and thought that this was probably maturity. My parents are still children, maybe: they think that they can remain innocent.<sup>21</sup>

ロザマンドの「両親の自己犠牲を、あるいは両親の愛情を感謝するより、具体的な便宜の方が自分には重要なことだ」という反応は、彼女の成熟を意味し、現実に覚めた若い女性の社会への適応の仕方である。

更に自意識を捨てることができたことを示す例として、彼女は自分の子供の手術の後、病院での面会を拒否され、病院の規則にもかかわらず、自己の要求を通すべく婦長にくっついてかかり、あたりかまわず泣き叫び、結局自分の無理を通すという出来事がある。自分の行為を「醜態」と考えず、「快拳」と看做す図太さは、彼女の成長であろう。

この作品は、未婚の母親として社会の中で、独力で生きて行く女性にとって、現実の厳しさを抽象的概念としてではなく、日々の瑣事の中で具体的に描写している。ドラブルはヒロインの生き方を、モラルとしてではなく、現代の風俗の中で捉えていると言える。

最後に、*Jerusalem the Golden* (1967) のヒロイン、クララは、北イングランドのノーサムという地方の「下層中産階級」に属しているが、彼女は奨学金を得てロンドンの大学に入り、自由の世界をもとめてロンドンに出て来る。クララは初めてロンドンの劇場で詩の朗読を聞き、詩そのものや詩の朗読法について価値を判断できるとは思えないと言いながら、ある詩人については、

He looked so unlike a poet that Clara felt that he could be nothing else, that he was unmistakably the real thing, and she found in his solid, impassive cultured countenance a guarantee of worth. His poetry she could not understand. It was about subjects of which she knew nothing, and the scansion of it was regular, and it rhymed.<sup>22</sup>

と勝手に思い込んでしまったり、そこで出逢った上流階級の人々に、その複雑さと洗練された様子に、若い娘らしくすっかり心を奪われる。例えば、バーでの上流社会の女性の気取った態度に対して、

Clara found this sight cheering, disturbing, and exciting. She wondered if in such circles such an act meant something or nothing, and then concluded that nothing, anywhere, in any circle, meant nothing.<sup>23</sup>

と自分に言いかせる様子など、地方出身の新鮮な感覚を持つクララを通して、上流社会の人々の行為や誕めいた会話に、衣服・化粧に、部屋の家具や装飾に、現代の都会の風俗が描かれている。

彼女が複雑な考え方を持つ人々にあこがれたのは、因襲的な地方社会、愛情のかけらもないような家庭、とりわけ偏狭な考え方に支配される母親への反撥心によるものだが、殊に地方社会の下層中産階級に属する母親の倫理観を彼女は嫌悪している。即ち、夫の死に際して一粒の涙も見せず、葬式に喪服を着る事を偽善的浪費だと看做したりする。その偏狭さを示すものとして、次の様な例がみられる。

Clara often thought that Mrs Maugham's attitudes towards the television typified her whole moral outlook ; before acquiring it she considered it infinitely vulgar and debased ; after acquiring it she considered all those without it as highbrows, intellectual snobs, or paupers, while atill managing to retain her scorn for all those who had had it before the precisely tasteful, worthy and perceptive moment at which she had herself succumbed to its charms.<sup>24</sup>

更に、母親の俗物根性を示すものとして、自分の階級への執着振りをユーモラスに描いた箇所がある。

And everything was ugly. Clara could have forgiven the things their ugliness, if that very ugliness were not such a source of pride. The cloth was linen, for Mrs Maugham held that plastic table cloths were the last resort of the working classes, and had said so often and at length ; but it was adorned with place mats of plastic. There was no need for place mats as the meal was to be cold, but place mats were invariably laid. The rest of the objects were more in keeping with the plastic table mats than with the linen cloth, for Mrs Maugham was in practice a sworn friend to the synthetic ; to her, utility was a prime virtue. And yet her views of utility were far from strict.<sup>25</sup>

彼女の母親とは対照的に、ロンドンで出逢った上流社会のデナム家の人々は、自由で愛情に溢れ、彼女は完全に魅せられる。彼女の上流社会に対する思い込みが、逆に彼女自身階級に偏見を持っていたことを物語っている。恋人となったデナム家のガブリエルの勤務する放送局に彼を訪ね、その部屋の中に眩いばかりの、人気絶頂にいるポップシンガーの写真が、ぎっしり

張りめぐらされているのを見て、彼女は今迄片寄った階級意識から、安っぽい写真に興味を持つことを、“an indication of immaturity, of poverty, of lack of resources, of making do with second best :”<sup>26</sup> と見なして来たし、母親と同様、ピューリタン流にポップスの世界を、軽蔑して来た自分に気付く。そして、“... shw wondered what stubborn narrow prejudice had blinded her but an instant before.”<sup>27</sup> と、多面的な物の見方が出来ることが真の「自由」だということに気付く。

ガブリエルとの一週間の秘な旅は、彼女の成長を促している。ガブリエルとのいさかいの後、一人でパリからロンドンに戻って来る時、空港の洗面場でその使用料を請求され、お金の足りないことに気付いた時、“If I owe you twenty-five cents, does that mean I can't go on the aeroplane?”<sup>28</sup> と大胆に言っける。その時、彼女は自分が自我の意識から完全に断ち切られたことを知る。

人間が様々な経験に基き自己認識に至るのは、本来人間としての当然の人生の過程と言えるであろうから、クララが自己認識によって人間的成長をなしえたという事も当然だと言えよう。

先の作品に於ても、ヒロインの個性的精神発達が展開されてはいるが、ヒロイン達の人間形成は、彼女達の属する社会とのかかわりあいにて達せられるのであり、彼女達は他者（社会）と自己との関連を認識するのである。とはいえ、オースティンの小説の「社会」と「個人」との対立から調和へを第一と見做す倫理的風俗小説とは異なり、ドラブルの小説では、風俗が描かれているが故に倫理性があらわれて来ると言えよう。ドラブルのヒロインは風俗の違いに気がついて、それによって他者を判断することはしない。風俗の相違はモラルとは結び付いていない。

クララは小説の最後の場面に於て、母親が死にかけているのだが、ガブリエルと仲直りし、ドライブに誘われて彼との不倫の愛を、ガブリエルとクレリアと自分との理想的な結び付きを想い描いている。

... a bright and peopled world, thick with starry inhabitants, where there was no ending, no parting, but an eternal vast incessant rearrangement : and more close to her, more near to her, the drive in the car, the lengthy devious delicate explanations, the nostalgic connection more precious, more close, more intimate than any simple love, and the wide road itself, the lanes of traffic, the headlights, the speed and the movement, the glassy institutions where they would eat eggs and chips and put coins in fruit machines and idly, gratuitously drink cups of nasty coffee, for the sake of it, for the sake of amusement, and all the lights in the surrounding dark.<sup>29</sup>

この結末は、*The Waterfall* (1969) のヒロインであるジェインの場合と類似しているが、二人の行為は既成社会の道徳的観点から据えられているのではなく、ミルの理念に基く自己展開を為し、自らの責任感と社会との連帯感を失わずに生きてゆくという現実認識のプロセスとして捉えられている。

様々な価値観を持つ現代社会にあって、「個人」と「社会」との対立ではなく、「個人」は「社会」といかに共存するか、そこにはいかなるマナーズが存在するか、そこにはいかなるマナーズが存在するかが小説に描かれている。

ヒロイン達の愛の風俗は、先に引用した「ガラスのピカピカ光る建物で卵とポテトチssp



スを食べ」、「コインを入れてゲームをたのしみ」、「ただのまずいコーヒーを何杯も飲む」という都会の風俗と奇妙な調和を見せていると思われる。

### Ⅲ

小説家は外観と現実の問題に関心を寄せているわけであるが、現実の有する大きな強みは、その厳しくどっしりとした具象性にある。ところが、小説になるとそれが抽象的なことに片寄りがちであるということは、マードックなどの問題とするところである。

現実を語ろうとすれば、社会的階級の存在を避けることができない。ドラブルの小説の方法は、様々な階級の出逢いを仕組み、その社会の風俗を丹念に掬い上げ、風俗の相違を記録することで現実とは何かという疑問を喚起していると思う。

結局、何もかも自分と関係していることが全て現実であり、ヒロイン達は他者とのかかわりあいの中から連帯感を見出し、自らの経験が矛盾している総体としての現実を受け入れることを教えている。

ドラブルがインタビューで表明した英国の伝統的小説への試みは、初期の作品に於ては、一作ごとにプロットの複雑さを増し、風俗のドラマ化というオースティンに源を持つ風俗小説の復活をなしていると思う。

### 注

1. Hardin, N.S.: Interview with Margaret Drabble, *Contemporary Literature*, XIV, 4, 273, (1973)
2. Vinson, James (ed.): *Contemporary Novels*, 373-4, Collier-Macmillan, London (1976)
3. Hardin : *op. cit.*, 274.
4. Quoted in Bernard Bergonzi: *The Situation of the Novel*, 78, Macmillan, London (1970)
5. Trilling, Lionel: *The Liberal Imagination*, 212, The Viking Press, New York (1951)
6. リチャード・ホガート, 香内三郎訳: 読み書き能力の効用, 17, 晶文社 (1974)
7. Trilling : *op. cit.*, 206.
8. *Ibid.*, 216.
9. Drabble, Margaret: *A Summer Bird-Cage*, 78, Weidenfeld and Nicolson, London (1963)
10. *Ibid.*, 149.
11. *Ibid.*, 8.
12. *Ibid.*, 68.
13. Trilling : *op. cit.*, 209.
14. Drabble : *op. cit.*, 216.
15. Drabble, Margaret: *The Millstone*, 31, Weidenfeld and Nicolson, London (1965)
16. *Ibid.*, 57.
17. *Ibid.*, 20.
18. *Ibid.*, 66.
19. *Ibid.*, 129.

20. Hardin, N.S. : Interview with Margaret Drabble, 277.
21. Drabble: *op. cit.*, 168.
22. Drabble, Margaret: *Jerusalem the Golden*, 14, Weidenfeld and Nicolson, London (1967)
23. *Ibid.*, 19-20.
24. *Ibid.*, 47.
25. *Ibid.*, 49.
26. *Ibid.*, 170.
27. *Ibid.*, 171.
28. *Ibid.*, 206.
29. *Ibid.*, 224.